



未接触の安全圏

欲しかったのは、人ではなく、
触れられないままの距離だったのかもしれない。

近づくことが目的だったはずなのに、
触れた瞬間、熱が引いていく。

拒絶ではない。
失望でもない。

ただ、
触れたことで、何かが均されてしまう。

関係が始まると同時に、
すでに終わっているような、あの平坦。

それは、冷たさではない。
関心がないわけでもない。

むしろ、近づこうとしている。
会えば話すし、応じる。

ただ ——
触れられる位置に固定されると、
そこに留まれなくなる。

近づく前のほうが、
輪郭は保たれている。

まだ触れていない状態。
確定していない位置。
名前を持たない関係。

その曖昧さの中でだけ、
かろうじて形が保たれる。

距離は、不安から生まれたものではなく、
崩れないための配置だった。

近づきたい。
だが、触れたままではいけない。

求めることと、
保つことが、同じ場所に並ばない。

関係が成立すると、
その内側で、何かが薄くなる。

失われるのは、関係ではない。
触れたあとに、残らなくなるもののほうだ。

触れた瞬間、
距離だけが、失われたのではなかった。





Edition — 存在の芯
別景：未接触の安全圏

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026